

甲状腺検査 甲状腺検査 先行検査結果に対する見解

- これまで施行されていなかった子供の甲状腺検査を行うことにより、ほぼ一定の率で甲状腺がんが見つかった。
細胞診の結果悪性ないし悪性疑いの割合（一次検査受診者に対し）

| 平成23年度 | 平成24年度 | 平成25年度 |
|--------|--------|--------|
| 0.03% | 0.04% | 0.04% |

第20回福島県「県民健康調査」検討委員会資料

- 福島の先行検査で見つかった甲状腺がんは放射線の影響とは考えにくいと思われる根拠
 - ・福島での被ばく量が、発がんリスクを増加させるほど高くないこと
 - ・東京電力福島第一原子力発電所事故前に知られていた小児甲状腺がんの年齢分布とパターンが似ていること
 - ・地域別に線量の差が知られているにもかかわらず、がん発生の地域差があまり見られないこと

○原子放射線の影響に関する国連科学委員会（UNSCEAR）の2015年白書*の中で、「放射線被ばくによる甲状腺がんの過剰な発生は考慮に入れる必要がないとみなされている。」との認識をあらためて示した。
*東日本大震災後の原子力事故による放射線被ばくのレベルと影響に関するUNSCEAR2013年報告書刊行後の進展（国連科学委員会による今後の作業計画を指し示す2015年白書）

**放射線の影響をみるためには、長期間経過を見守る必要があります
皆様の健康管理のためにもぜひ継続してご受診ください**

現在、福島県で行われている甲状腺検査で見つかった甲状腺がんは、東京電力福島第一原子力発電所事故による放射線の影響とは考えにくいとされています。背景としては

- ・放射線に対する感受性が高い被ばく時低年齢（0～5歳）の方に甲状腺がんの発症者がいないこと
- ・福島での甲状腺被ばく線量がチェルノブイリと比べて低いと推定され、発がんリスクを増加させるほどではないと見られていること
- ・地域別に線量の差が知られているにもかかわらず、細胞診による悪性ないし悪性疑いの方の割合に地域差が見られないこと

等が挙げられます。

しかし、放射線影響をみるためには、今後も長期にわたり経過を見る必要があり、これからも継続して検査を受診することが必要です。

本資料への収録日：平成27年3月31日

改訂日：平成28年3月31日